

竹市先生の思い出

小 川 侃

私が竹市先生と知り合ったのは、どのようにしてなのかはもはや忘却の谷に沈みこんで明瞭には分からない。おそらく故常俊宗三郎氏（関西学院大学教授）を通してだろうと思う。常俊氏は、もともとカントを研究していたが、フッサール研究の盛り上がり魅せられたのであろうか、当時勤務していた大阪女子大から派遣されてドイツに行くことが決まり、ケルンのフッサールアルヒーフに行きたいということになったようである。当時はすでに40台の初めであった。ケルンは、旧西ドイツの交通の要であるということも関係している。

当時は、フッサール研究が日本でもやっと本格的に始まったばかりであった。私は、欧米の研究に依拠した二次文献の研究は、真の意味での哲学研究ではないと固く信じており、その故に、ドイツ連邦共和国のケルンにいき、そこでフッサールのマヌスクリプトを読み考えることを希望していたのである。それゆえ、ケルン大学のフッサール文庫に留学して、解

読された速記原稿を読むことが出来た。私はすでにラントグレーベ教授から招待状をもらっていた。ご存知のように、フッサールは、ガーベルスベルガー速記術(Gabelsbergerkurzschrift)で分析と記述を行っており、弟子たち (Edith Stein, Ludwig Landgrebe, Eugen Fink) がそれを普通のドイツ語に翻訳転記していたのである。ケルンのフッサール文庫の某氏によると、ガーベルスベルガー速記術には欠陥があり、十分に書くことが出来ない文字があるので、ドイツ語圏で廃れたのだということであった。いずれにしても半年早くドイツに来ていた私に、常俊氏から連絡があり、フッサール文庫に行きたいからよろしくというので、ケルン大学の表玄関で待ち合わせで、当時のフッサール文庫に案内して連れて行き、常俊さんと同じ机に座ってフッサールの原稿を読んだ。私は、フッサールの時間論を読み、メモしていた。たとえば、フッサール文庫の記号で、BIII9等を読んでメモしている。ここには、感

情の“Urthyle”（原感情）という概念が出てきている。フッサールはどこまでも分析しないと満足しないという性格を持っており、それを端的に示している。私は、現在では、フッサールのこのような傾向には問題があると見ており、別に論文を書かねばならないと思う。多くの若者がなぜハイデッガーに魅惑されるのかも関係している。

ところで竹市氏はおそらく小川が三宅ファンであるという話を、常俊さんからきいて、私のことを「フッサール研究をしている三宅ファンの人間」として注目したのではないかと思う。なぜなら私は、修士課程の頃に、三宅剛一先生に手紙を書いてお返事をもらっているのもそのことも常俊、竹市両氏に話したと思う。竹市先生は、その三宅先生の私宛ての手紙を確認し読むために、京都の南区の私のマンションにまで来られた。三宅剛一先生こそは、『人間存在論』という書物を出版され、この書物こそは我々の『人間存在論』という雑誌の名前の母なる書物である。竹市氏は、三宅門下であった三宅剛一は、西谷啓治と仲が良く、三宅先生は、京都大学での定年まで4、5年しかないのに、それを承知で東北大学から京都大学の文学部の哲学の教授に戻ってきたのである。（一説には、田中美知太郎が文学部の第一講座、通称純哲の教授になろうとしていたといわれる。）故新田義弘先生の話では、三宅先生が京都大学に戻るのには、仙台で学生の反対運動があったということである。この三宅先生の仙台から京都への移籍には、西谷啓治先生の懇請もあったと仄聞している。それほど当時の京都大学の哲学は荒れておったのであろう。

当時私は京都産業大学の哲学とドイツ語の専任講師であったが、竹市氏は、広島大学が教員を公募しているという電話とともに、その公募用紙を送ってきてくれた。私は父から広島大学は、文理大の伝統を持つ立派な大学であるということを知っていたので応募した。竹市氏は、さすが「人事の竹市」であり、広島大学の総合科学部のトップであった式部久氏の師が高田三郎先生だということを見つけ出し、一緒に銀閣寺道の近くの高田先生の家を訪問した。高田先生に私のことをお願いしてくれたのである。

私の広島大学におけるポストは、「ヨーロッパ哲学思想」であり、私は、京都大学の学士論文が、シェリングの「自由論」をテーマにしており、「人間的自由の本質と無底について」という表題をもつ。この論文は、いわゆる「自由論」と同じ時期に書かれた「学としての哲学の本性について」や「世界時代」をも扱っており、中期シェリングを解明する徹底的な論文である。野田又夫、辻村公一の両先生から高い評価を受けた。そして修士論文は、「時間と自由——シェリングとベルクソンとをめぐる試論」であった。

私は京都大学の教養部では、英語とフランス語のクラスに入っており、ドイツ語は自分で勉強した。このベルクソンの論文はのちに『哲学研究』に掲載された論文の原型であり、ベルクソンの「二段構えの反省」など面白い解釈の提案が見られた。たまたまシェリングとベルクソンというドイツ哲学とフランス哲学の研究をしていたからヨーロッパ哲学思想の適任者ということになったようである。

私が広島に行き最も困ったのは、衣食住の住であった。当時はまだ広島大学は東広島に将来移るといふ話だけであり、広島市内の牛田に住んだ。しかし、近所がやかましいので、牛田で転居を3回した。犬の鳴き声、近所の話し声がかましい。フンボルト財団の奨学研究員としてドイツに行くために、最後には、牛田早稲田のマンションに入った。荷物を保管するために最もよいのはマンションであろう。牛田の山の上のマンションである。このマンションには、のちにヘルト教授を招いたときにも来られた。広島は海の幸が豊かで地中海に似た気候風土は大好きであった。私は永住するつもりで廿日市市阿品台に土地を買い、家を建てた。それは安芸の宮島を眼下におさめる高台であった。

時節は、京都大学の教養部がいよいよ教養部を改組して学部と大学院を作りたいというときであった。したがって、竹市氏から大学の研究室、私の自宅に絶えず電話が掛かってきた。問題は、広島大学の改組のモデルから何を学べるのかであった。いろいろな資料、広島大学の総合科学部の全体の組織やその他をコピーして竹市氏に送ってあげた。私は基本的に文系の人間なので、理系に関しては、良く分からないこともあり、広大から牛田に通うバスの中で知り合った同僚を竹市氏に紹介した。豊島喜則氏である。彼は、化学者であるが論文の数も多くあり、その後、京都大学の総合人間学部の三代目の学部長になっている。

竹市氏は、人が有能かどうかを見抜く眼を持っていたのであろう。私は、京都大学に戻りたいとは思わず、むしろ、広

島に永住するつもりで家を建てたのである。現在でも広島への憧憬は残っているくらいだ。

京都大学の教養部改組が目前になりかけた頃に竹市氏からの電話が朝昼晩と絶えずかかるようになった。「京都大学に戻ってきてくれ」と言うことであった。私は何度もお断りした。そうすると、大阪に住んでいた私の父から電話がかかり、こんな良い話はないからお受けするようにという。すると直ちに家内との結婚の際の仲人だった北山正迪先生からも電話がかかってきた。彼は、広島出身なので広島の良い所も良く知っている。最後に、家内の下京の父親からも電話がかかってきた。こんないい話は無いからお受けするようにと言うことであった。結局、周りの堀を埋められて関西に帰ることにしたのであった。山崎和夫教養部長が、広島にこられて広島大学の総合科学部長と話をされて私の所にこられた。山崎先生を広島駅までお送りした時のことは良く覚えている。

竹市先生は、ご自分の意志を遂げるためには、いろいろな人を助けるという傾向があった。いろいろな話を聞いているが、私が岡崎の人間環境大学に学長として行った頃、臨床心理学が少しずつ普及してきており、今でも臨床心理士は国家資格にはなっていないようだが、きちんと大学を卒業していないといけないものである人に関西大学の博士を取得するようにお世話したと聞いている。

私は、もともとすこし知っていたカスピ海ヨーグルトの森幸男先生を竹市氏に正式に紹介された。岡崎の人間環境大学に赴任する直前だった。京都の北区の料亭だったと思う。

ひとつには、岡崎の人間環境大学に健康社会創成コースを立ち上げるので竹市先生に相談したら、家森幸男先生を客員教授に招くのがよいということでした。人間環境大学のパンフレット、2009をみると、故梅原猛、竹市明弘、家森幸男の諸先生の座談会が掲載されている。最後に竹市先生が次のように締めている。「今後の日本人のあり方をどう考えるのか。身体の健康、歴史と文化の環境、そして日本のすばらしい自然を背景にした我々の生。そのなかでどのように生きていくのかを考えるのが新しいコースのカリキュラムです。先生方のお話で新コースの取り組みがさらに力強くなると思います。」